

アイヌ生活文化再現マニュアル



アイヌ生活文化再現マニュアル

# イオマンテ

熊の霊送り  
【道具編】

## 発刊にあたって

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構は、平成9年7月の設立以来、アイヌ文化の振興、アイヌの伝統やアイヌ文化に関する知識の普及と啓発、アイヌ文化等に関する研究の推進や助成などの各種事業を実施しております。

そうした事業の一環である「アイヌ生活文化再現マニュアル作成事業」は、アイヌの伝統文化を、映像や音声、文字などによって記録し、アイヌの人々をはじめとして、広く一般の人々や研究者の利用に供することにより、アイヌ文化の伝承・保存を図ることを目的としています。

本マニュアルがより多くの人々の利用に供され、アイヌ文化の振興が推進されるとともに、我が国の多様な文化の一層の発展が図られれば幸いです。

## 目 次

発刊にあたって

はじめに

### 〈道具の制作〉

材料採集……………4

### 〈祈り イナウ類〉

イナウ……………7

[イナウの基本的な作り方・イナウケ]……………7

キケチノイエイナウ (削りかけを擦ったイナウ) ……10

サケイナウ (酒のイナウ)……………16

タクサイナウ (清めのイナウ)……………16

キケパラセイナウ (削りかけを散らしてあるイナウ) ……20

チェホロカケヅイナウ (逆さに削ったイナウ) ……23

イヌンパストゥイナウ (酒をしぼる棒のイナウ) ……26

コンカニイナウ (黄金のイナウ)……………28

イナウル・イナウキケ (削りかけ)……………28

ストゥイナウ (棒のイナウ) ・ハシナウ (枝のついたイナウ) ……30

ストゥイナウ (棒のイナウ)……………30

ハシナウ (枝のついたイナウ)……………32

### 〈祈り パスイ類〉

キケウシパスイ (削りかけつきパスイ) ……33

マラプトパスイ (熊神のパスイ)……………35

### 〈祈り その他の道具〉

カムニツ (熊肉を配る串) ……37

キナラリプ (ゴザを押さえるもの) ……39

シトニツ (団子の串) ……40

ポンペラ (小さなへら)……………42

〈神の旅立ち〉

ヤシケオックニ（子熊をつなぐ棒）	43
ヘペルトウシ（子熊をつなぐ綱）	46
イヌンパニ（熊の息をとめる2本の丸太）	46
オクメウエニ（枕木）	47
ユクサパオニ（熊の頭骨を安置する二又の木）	48
ク（弓）・イソノレアイ（仕止め矢）	50
ク（弓）	50
イソノレアイ（仕止め矢）	53
カムイソ（神の座）	58
ケトウシ（神へのお土産を入れる入れ物）	59

〈神の旅立ち お土産〉

ヘペレアイ（花矢・子熊の矢）	60
おわりに	65
参考文献	66
イオマンテの道具類を展示・収蔵している施設	67

以下の写真につきましてはアイヌ民族博物館所蔵のものをお借りしました。

- 1 ページ ● 4 ページ 写真 4 ● 41 ページ 写真124 ● 46 ページ 写真134
- 48 ページ 写真141 ● 65 ページ

## はじめに

狩猟採集を生業としていたアイヌは、狩猟の対象など生活の中で深い関わりを持つ動物をカムイ（神）として敬い、その魂を大切に取り扱いってきました。

「イオマンテ」とは「動物の魂をカムイモシリ（神の国）へ送る」という意味で、広く動物神の霊送りの名称として使われる場合がありますが、一般的には「飼い熊の霊送り儀礼」を指す言葉として知られています。春先のヒグマ猟で、母熊と共に生まれたばかりの子熊を手に入れると、人々はカムイから養育を任された名誉あることと考え、授かった子熊を大切に育てました。そして1～2年ほど飼育した後は、その魂をカムイモシリへ送り帰す盛大な儀式が、集落をあげて営まれてきたのです。イオマンテは、カムイを敬い、日常生活の中で常にカムイの存在を意識してきた人々が、たくさんのお土産を持たせて子熊の魂を送ることでその再訪を願い、食料の安定供給を求めるといふ、アイヌにとって最も重要な伝統儀式のひとつです。イオマンテは、明治以降の同化政策による生活環境の変化などにより、次第に行われなくなりました。現在、イオマンテに関する伝承は、地域や個人によって儀式の手順や作法、使われる道具などに違いがあります。今回のイオマンテで使われる道具の再現は、道南の白老地方に伝わる方法です。白老のアイヌの伝統技術を伝承するアイヌ民族博物館が制作します。



## 〈道具の制作〉

白老はアイヌの伝統儀式「イオマンテ」を現代まで伝える数少ない地域のひとつです。

アイヌはカムイと共に暮らしてきました。そのアイヌの住居には様々なカムイが祀られています。一番身近な火の神をはじめ、家の神などの神々に「イナウ」を捧げています。

日々の生活で、そして儀式のときにこの「イナウ」に祈るのです。(写真1、2、3)



写真1



写真2



写真3

「イオマンテ」の儀式では、祈りに欠かせない多くの用具が必要です。

中でも「イナウ」は様々な場所、場面で使われるため数多く作ります。イナウの役割は、イナウそのものがカムイであったり、カムイがこの世に現れる場合の依代でもあり、カムイが喜ぶ供物であり、カムイモシリへ持ち帰るお土産でもあるなど、一つではありません。その役割の最も大きな部分は、アイヌとカムイの仲介者としてアイヌの言葉を正しくカムイに伝え、また言葉の足りないときは言葉を補い伝えることと考えられています。

また、イオマンテのときだけに必要とされる熊の頭骨を納める祭具も作ります。

## 材料採集

道具の制作にあたっては、イオマンテを行う約2週間前から山に入り、材料の調達を始めます。そして式の当日まで制作を続けます。祭壇に飾るイノウ、頭骨を納める二又の木など祈りの儀式に欠かせない道具は数十種類にのぼります。(写真4)



写真4

材料にはシコロ・キハダ、ミズキ、ヤナギが使われます。

キハダは外皮を剥くと鮮やかな黄色い色で、アイヌは黄金の木、位の高い木と考えていました。イオマンテの道具の中でも特に重要（神聖）なイノウなどに使います。

キハダはまた二又の道具、イノウやイノウの脚になる材料にも用います。(写真5、6)



写真5



写真6

イオマンテは冬に行われます。男たちは、普段から材料の採取できる場所を見ておき、雪の中でもすぐに採りに行けるようにしていました。

ミズキはイノウでは一番多く使う木です。風当たりの少ない場所に立つまっすぐな木を探し、枝や節のない素性の良い木を選びます。直径は2.5～4cmのもので、70～80cmの長さで切ります。木の成育にむらのできるツタなどが絡んでいる木は忌み嫌い使用しません。(写真7)



写真7

ヤナギもイオマンテの道具では、数多く使われます。根元側の直径はおよそ3cm、長さは120cmほど必要です。

材料は一カ所から全てを切ってしまうわずに幾本かを残し、次に来たときにも採ることができるようにしておきます。

これらの材料の他に付属するものとしてイチイ、トドマツの枝葉、笹などを採取します。(写真8)



写真8

ヤナギは枝のないものと上部に枝が1本ついたものを採取します。(写真9)



写真9

イナウを作る木を「イナウネニ」といい、これらの材料を使って様々な形のイナウを作ります。(写真10)



写真10

# 〈祈り イナウ類〉

## イナウ

イナウはアイヌ独自の信仰から生まれたもので、その精神文化を象徴するもののひとつです。用途は極めて広く、祈りを行うときに無くてはならない大切な祭具です。イナウの作り方は用途により形が異なりますが基本的な削り方は同じです。

### [イナウの基本的な作り方・イナウケ]

道具はマキリが中心になります。

左側の2本が、イナウを削るための道具「イナウケマキリ」です。(写真11)



写真11

イナウネニは実際に作るイナウよりも長く70~80 cmです。(写真12)



写真12

まず樹皮をマキリ（小刀）で全て剥ぎ取り、乾燥させます。作るイナウにより樹皮を一部残すこともあります。（写真13、14）



写真13



写真14

イノウケマキリを材料に斜めにあて、一気に手前に引き寄せて削ります。

これを「イノウケ」といい、薄いカールのかかった削りかけのことをキケと呼びます。（写真15）



写真15

材料は、左手で木の梢側を持ち、少しずつ左に回して削る位置を変えます。この作業を繰り返して様々なイナウの形を作ります。

材料の乾燥具合や、支えとなる木片の微妙な角度によりカールのかかり方が違ってきます。(写真16、17、18)



写真16



写真17



写真18

祭壇に立てる主要なイナウには、先祖からの印「イトゥパ」を刻みつけます。イナウに刻むイトゥパはイオマンテを執り行った家の印をつけるのが通例です。

今回は、白老のアイヌ民族博物館がイオマンテを行うので、組織の印を刻印しています。刻んだときに出る木の破片は捨てることなく火にくべます。(写真19、20)



写真19



写真20

## キケチノイエイナウ（削りかけを撚ったイナウ）

「キケチノイエイナウ」をミズキで作ります。長さ70cm、太さ3cmほどの材料を用います。

(写真21)



写真21

梢側を12cmほど残して、9～10枚の削りかけを削り、右回しで撚って、削りかけの束にします。(写真22、23)



写真22



写真23

削った側とは反対に束を強く引きます。削りかけの止めの部分を刃物の背で叩き、束の根本を落ち着かせます。(写真24)



写真24

削りかけを作り、撚って束ねていく作業を繰り返し、材料を一周して15～16本の削りかけの束を作ります。(写真25)



写真25

ここでは太さが3 cmほどの材料でしたが、太さの違いで束の数が変わります。(写真26)



写真26

イナウを縛っておく帯「イナウクツ」を作ります。

本体から5～6枚の削りかけを削り、紐状に撚ってマキリで本体から切り離します。削り取った先は整えます。このイナウは祭壇に立てるまで、この帯で削りかけの束を縛っておきます。

この帯は祭壇に立てる際、イナウとイナウの脚にあたる材料の継ぎ目に結びます。(写真27、28)



写真27



写真28

イナウの下部を削るため、束ねた削りかけを上押し上げます。

イナウは木の生えていた場所で太陽の当たっていた方向を正面にします。

イナウの下部は裏側を斜めに切り落とします。

斜めにするのは、後に脚に当たる材料と接合するためです。切り口はマキリを使って整えます。(写真29、図1)

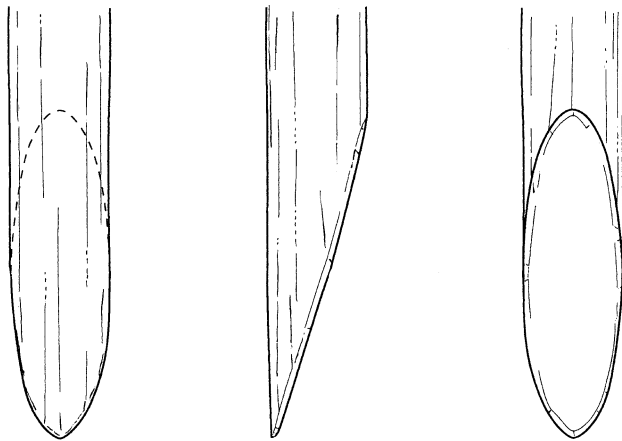


図1



写真29

表側には上から下に向けて「ラフ」を5つ削ります。これはイノウに脚を接合するときのためのものです。

(写真30、31)



写真30



写真31

キケチノイエイナウの上部に「イトツパ」を刻みます。(写真32、33、34)



写真32



写真33



写真34

イナウを祭壇に立てるときに脚となる「イノウケマ」を作ります。材料はキハダです。

長さはおよそ140cm。上の部分の樹皮をおよそ30cmほどを剥がし、イナウと接する部分を斜めに削ります。イナウの下と角度を合わせます。イノウケマは、ラブを下から上に向けて5つ削ります。

(写真35)



写真35

接合するときには使う幅1cmのヤナギの樹皮を用意しておきます。(写真36)



写真36

下部は祭壇に立てるイナウの基本的な形に削ります。皮は剥がずそのまま正面側の面を斜めに落とします。

正面と側面、そして後ろ側では削り方が違ってきます。(図2)

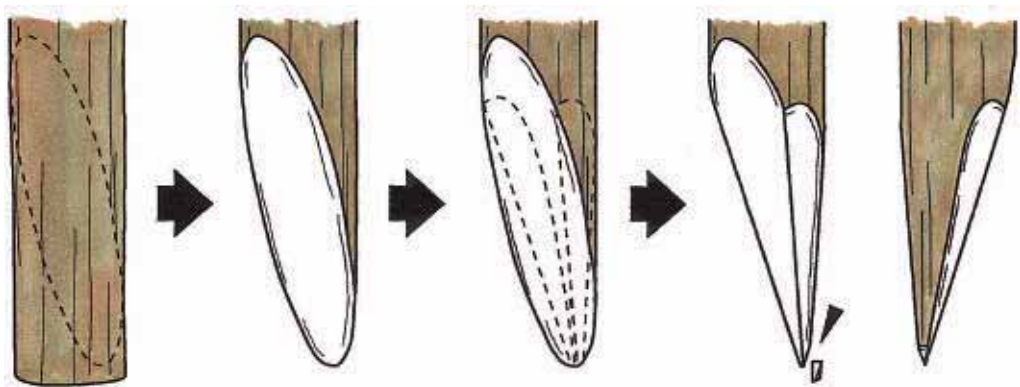


図2

イナウの下の斜めに削った面とイナウケマの上の面とを合わせ、ヤナギの樹皮を使いキケチノイエイナウとイナウケマを接合します。(写真37)



写真37

ヤナギの樹皮を巻き、樹皮の端を合わせた面に挟みます。両方のラフに挟み込みながら巻きます。このように巻くと、ずれて外れることはありません。(写真38)



写真38

キケチノイエイナウは14本作ります。イナウケマだけでなく熊の頭骨を納める二又の木にも接合させます。キケチノイエイナウと同じ形で熊檻の上に祀る「ヘペレセツイナウ」もあります。(写真39、40)



写真39



写真40

## サケイナウ (酒のイナウ)

キケチノイエイナウと形態が同じで、使われる場所などによって下の部分の削り方が違うイナウのひとつがサケイナウです。サケイナウはイオマンテのときに囲炉裏の上座に立てておくために下部は円錐形に尖っています。このイナウは1本だけ作ります。サケイナウは「チセコロイナウ」(家のイナウ)とも呼ばれ、上部にイトクパを刻みます。(写真41)



写真41

## タクサイナウ (清めのイナウ)

イオマンテにおいて子熊を檻から出して遊ばせるためのイナウ「タクサイナウ」です。

タクサイナウを子熊の前で振って遊ばせ、子熊を繋ぐ場所まで誘導します。

このタクサイナウは子熊のカムイがカムイモシリに帰る際の脚になると伝えられています。(写真42)



写真42

タクサイナウにはキケチノイエイナウを使います。  
他に脚となる直径約3.5cmの皮付きのキハダ、笹、  
シナの紐を用意します。(写真43、44)



写真43



写真44

脚になる材料の上の端に鉋で割れ目を入れ、その  
口を広げるようにマキリで削ります。端の面から約  
6 cmまで切り込みます。

ここがキケチノイエイナウを差し込むところ  
です。(写真44)



写真44

脚の下部を削ります。※図2を参照(写真45)



写真45

くさび型に削った切り込みの周りを笹で覆います。笹の茎で覆った部分は、シナの樹皮から作った丈夫な紐で固定します。(写真46)



写真46

タクサイナウを結ぶのは3カ所です。  
笹の茎の長さを25cmほどにして切り揃えます。  
(写真47)



写真47

キケチノエイナウの下部は正面と裏側を削りくさび状にします。(写真48、49)



写真48



写真49

脚の割れ目にイナウを差し込みます。(写真50)



写真50

実際に使うときには削りかけの束を縛っていた帯・イノウクツを解き、イナウの芯に結びます。(写真51)



写真51

タクサイナウは祭壇に4本立てます。(写真52、53)



写真52



写真53

祭壇に立てるときに脚を接合させるイナウには、他に「キケパラセイナウ」があります。

## キケパラセイナウ（削りかけを散らしてあるイナウ）

「キケパラセイナウ」は祭壇に祀るカムイのうちの3つのカムイに捧げられます。(写真54)



写真54

キケパラセイナウは長さ、太さともにキケチノイエイナウと同じです。

材料はミズキで、少しずつ左へ回しながら、100枚ほどの削りかけを削ります。(写真55)



写真55

削りかけの根元を叩いて落ち着かせ、削りかけを撚らずそのままに垂らしておきます。(写真56)



写真56

下部はキケチノイエイナウと同じです。イナウケマと接合するので、ラフを上から下へ5つ削ります。(写真57、58)



写真57



写真58

このイナウも帯・イナウクツをイナウの本体から削り取り、削りかけの房を縛っておきます。(写真59、60)



写真59



写真60

祭壇に立てるときにはイトッパを刻みます。(写真61、62、63)



写真61



写真62



写真63

## チェホロカケイナウ（逆さに削ったイナウ）

これまでのイナウは根元側から上に削り、削りかけが下に垂れ下がるものでしたが、このイナウは逆に削り、上向きになります。（写真64）

※チェホロカケイナウは北海道東部地域においてストゥイナウと呼ばれています。



写真64

「チェホロカケイナウ」の材料はミズキです。下部24～25cmは残して皮を剥きます。（写真65）



写真65

削りかけは上下2段つけます。材料の木の根元側を左手に持ち、下段の削りかけを左右の2方向につけます。（写真66）



写真66

間隔を7～8cmとり、上段を削ります。上段は4方向で、削り方は同じです。(写真67)



写真67

4方向から削るため、イナウの断面が四角形になります。(写真68)



写真68

頭になる部分はこの四隅に、切り込みを斜めに入れて折ります。(写真69)



写真69

折った部分は窪み、四隅が尖ります。儀式のときにはここに酒かすなどをのせて祈るのです。(写真70)



写真70

イナウの長さは40～50cm。  
下部は基本的な削り方です。  
(写真71、72)



写真71



写真72

チェホロカケブイナウは祭壇を司るカムイに4本の他、祭壇の全てのカムイに対し一本ずつ添え、屋内の炉の上手には6本立てます。(写真73、74)



写真73



写真74

## イヌンパストゥイナウ（酒をしぼる棒のイナウ）

「イヌンパストゥイナウ」は、酒を漉してしぼるときの儀礼に使われます。

(写真75)



写真75

「イヌンパストゥイナウ」の制作です。皮のついたままのキハダを使います。

5～6 cmの長さのラブを上下2段つけます。上段にラブを左右に2枚つけ、下段には90度ずらして2枚削ります。(写真76、77、78)



写真76



写真77



写真78

上部には四方から切り込みを入れて折ります。  
(写真79)



写真79

イナウの長さは約50cm、下部は基本的な削り方です。火の神への祈りの際に炉の四隅に立てて頭部の窪みに酒かすを盛りつけます。  
(図3)

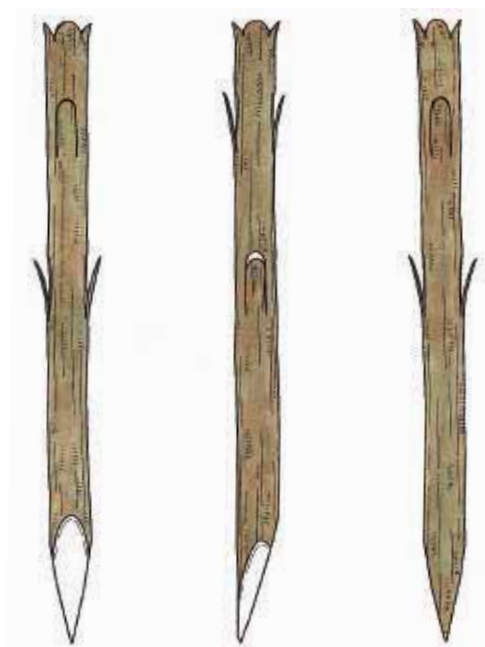


図3

## コンカニイナウ (黄金のイナウ)

「コンカニイナウ」はチェホロカケイナウと作り方は同じですが、子熊にくわえさせるため、2段の削りかけの間隔を広くしています。下側は基本的な作り方です。熊の神様に捧げるため位の高いキハダを使っています。長さは55cmです。(写真80)



写真80

## イナウル・イナウキケ (削りかけ)

「イナウル」は一般的に「イナウキケ」と呼ばれています。

式場の飾りつけや神に持たせるお土産の包装、頭骨の化粧など最も多く使われるイナウです。(写真81)



写真81

材料は太さ 4 cm ほどのミズキです。樹皮を剥いで乾燥させ、削りかけを奇数の11本にします。長さは約30cmで用途に合わせて調整します。削りかけの根元を整えたあとマキリを使い本体から切り離します。(写真82、83)



写真82



写真83

削りかけの根元を整えます。(写真84)



写真84

一本の材料から、たくさんのイナウルを作ります。イナウルを削りとって細くなった材料は他の道具を作るためにとっておきます。(写真85)



写真85

## ストゥイナウ (棒のイナウ) ・ ハシナウ (枝のついたイナウ)

「ストゥイナウ」は最も原始的なもので、このイナウから各種のイナウの形式が発達したと考えられています。

祭壇を司るカムイなどに捧げるイナウです。

「ハシナウ」は枝が1本ついたイナウです。ストゥイナウと作り方は同じですが、ラブを枝より上につけます。狩猟の神などに捧げます。(写真86)



写真86

## ストゥイナウ (棒のイナウ)

「ストゥイナウ」の材料は、長さ約120cmの皮付きの細めのヤナギです。

頭部を斜めに削ります。(写真87)



写真87

マキリでラブを上側寄りに3翼、3段つけます。1段と3段は同じ向きに2段目の向きをずらします。(写真88)



写真88

下側は祭壇に立てる他のイナウと同じ削り方です。(写真89)



写真89

頭部の斜めの面にはマキリで横一文字の切れ目を入れます。(写真90、91、92)



写真90



写真91



写真92

ストゥイナウは祭壇に祀るときに頭部の切れ目にイナウルを2つ刺して立てます。

祭壇を司るカムイなどに捧げるため、14本作ります。(写真93)



写真93

## ハシナウ (枝のついたイナウ)

「ハシナウ」は枝が1本ついたヤナギで作ります。  
(写真94)



写真94

ラフは枝より上につけます。ストゥイナウと同じように、頭部は斜めに落として切り込みを入れます。  
(写真95)



写真95

頭部にイナウルを2本挿し、枝を祭壇に向かって左にして立てます。  
狩猟の神に捧げるため11本作ります。(写真96)



ストゥイナウ

ハシナウ

写真96

## 〈祈り パスイ類〉

「パスイ」は酒などをイナウにつけてカムイに捧げるへら状のもので、人間の言葉をカムイに伝える役割があると考えられています。

### キケウシパスイ（削りかけつきパスイ）

「キケウシパスイ」はイオマンテ等の重要な儀礼において用いられます。  
(写真97)



写真97

材料は直径約5cm、長さ40cmのミズキを使います。  
(写真98)



写真98

2つに縦割りにし、マキリで皮を削って本体を薄くします。断面は上の面の中央が盛り上がった形で、厚さは5～6mmです。(写真99、100)



写真99



写真100

手に持って使うパスイは材料の根元側を「持ち手」側にします。

持ち手側の端は山型に削ります。(写真101)



写真101

持ち手と反対側は端から上の面約2cmを薄く平らにして、側面を斜めに落として先を舌状にします。(写真102)



写真102

形が整ったら、小さな削りかけを前後に2カ所ずつつけます。交互に削る向きを変えています。  
(写真103)



写真103

キケウシパスイの両端には3本の横筋が刻まれ、中央にはイトツパが刻みつけられます。

このキケウシパスイは儀礼のために新しく作られ、使用後は拝礼の対象となったカムイのイナウに結び祭壇に納めたり、火の神に用いたものは、炉火にくべます。(写真104)



写真104

## マラプトパスイ (熊神のパスイ)

「マラプトパスイ」は、熊のカムイの膳に供えられます。(写真105)

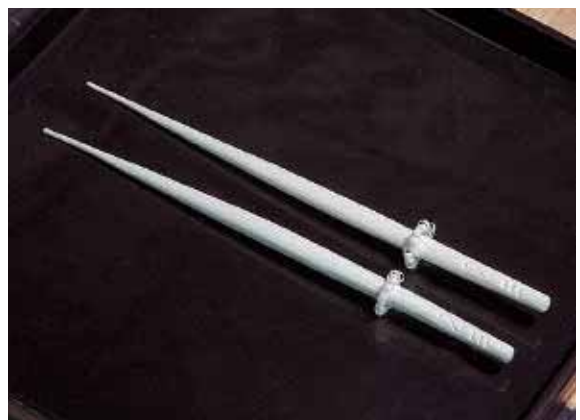


写真105

材料はミズキです。先端に向けて徐々に細くして  
箸の形に整えます。2本1組です。(写真106)



写真106

箸の元付近には端から約4cmのところに削りかけ  
をつけます。他の削りかけのように斜めではなく、  
まっすぐに巻くようにします。

少しずつ回しながら削り一周します。(写真107)



写真107

元側にはイトッパを刻みます。長さは24cmです。  
(写真108、109)



写真108



写真109

## 〈祈り その他の道具〉

### カムニツ(熊肉を配る串)

「カムニツ」は熊肉を刺して参列者に配るための串で、数多く作ります。

(写真110)



写真110

直径約3cmのミズキを縦に割り、薄く削っていきます。長さは約25cmです。(写真111)



写真111

先を尖らせて串状にします。(写真112)



写真112

根元側の左右の側面に根元側に削りかけをつけます。イオマンテの儀式のときに作るカムニツには、イトッパを入れています。(写真113、114)



写真113



写真114

## キナラリッ (ゴザを押さえるもの)

「キナラリッ」は屋内のゴザを止めたり、祭壇を飾りつける際にお土産などを止めるための串です。(写真115)



写真115

材料はミズキで、幅約2cm、長さ25~26cmで厚さを6~7mmにします。(写真116)



写真116

先端はゴザに刺しやすい形にします。(写真117)



写真117

根元側に削りかけをつけ、イトッパを刻みます。  
キナラリッも数多く作っておきます。(写真118)



写真118

## シトニツ（団子の串）

供え物になる団子の串「シトニツ」です。  
この串は中央に穴の開いた円盤状の団子に刺し通して使うものです。(写真119)



写真119

材料にはイナウルを削り取った後のミズキを使います。(写真120)



写真120

先側に向けて徐々に細くし、団子の穴に通しやすくするため尖らせます。

太いところで直径約1.5cmです。(写真121)



写真121

根元側にはイトoppaと小さな削りかけをつけます。(写真122、123)



写真122



写真123

シトニツは14~15個の団子を通し、周りをイナウルで飾りつけて祭壇に供えます。(写真124)



写真124

## ポンペラ (小さなへら)

「ポンペラ」は、熊の頭部の解体の際に、頭骨内の脳をとり出すためのものです。(写真125)



写真125

材料にはイナウを作ったときに残った木片などを使います。(写真126)



写真126

マキリで薄く削ります。幅約2cm、長さ約25cm、厚さはおよそ5mmです。先側の角を落とします。このへらには、削りかけもイトッパも入れません。(写真127)



写真127

# 〈神の旅立ち〉

## ヤシケオックニ (子熊をつなぐ棒)

「ヤシケオックニ」はイオマンテのときに子熊をつなぐ棒で、式場の中央に立てます。(写真128)



写真128

チェホロカケブイナウ、笹の葉、トドマツの枝葉、そして直径約10cmのキハダの棒を準備します。(写真129)



写真129

長さ220cmのキハダの棒を地中に約70cm埋め、地上には約150cm出しておきます。

棒の上面にマサカリで割れ目を入れます。

その割れ目は削って広げることとはしません。

(写真130)



写真130

下側をくさび状に削ったチェホロカケブイナウを割れ目に差し込みます。棒の延長線状になるよう中心にまっすぐに立てます。(写真131)



写真131

棒の上部の割れ目を笹で覆います。  
棒を一周して包み込み、シナの樹皮で作った紐で縛ります。(写真132、図4)



写真132



一部断面図

図4

トマツの枝葉を前後に2枚取りつけます。シナの樹皮で作った紐で縛ると出来上がりです。(写真133)



写真133

熊の解体の際に、チェホロカケブイナウの頭に熊の血をつけます。

## ヘペトウシ (子熊をつなぐ綱)

「ヘペトウシ」は子熊をつなぐ綱です。イラクサや麻で編まれたこの綱は子熊の首を締め過ぎないように工夫されています。(写真134、135、136)



写真134



写真135



写真136

## イヌンパニ (熊の息をとめる2本の丸太)

「イヌンパニ」は熊の首を上下から挟み息を止めるための木です。直径約12cm、長さ約3mのキハダです。1本は下に置いてその上に熊の首を乗せ、残りの1本をのせて挟み、男たちが上から押さえます。(写真137)



写真137

## オクメウエニ（枕木）

「オクメウエニ」は、熊の頭骨を祭壇に納める道具の一部です。

下に置かれているのは組んで使う二又の材料「ユクサパオニ」です。(写真138)



写真138

長さ約30cm、直径3cmのミズキを皮を剥かずに使います。

ラフを棒の左右に2枚ずつつけます。

左右では90度ずらします。いずれも中心に向けて開くように切り込みます。(写真139)



写真139

「オクメウエニ」は熊の解体中に気管を切る際に台木として使われます。その後、二又の材料と組み合わせて熊の頭骨をのせます。(写真140)



写真140

## ユクサパオニ (熊の頭骨を安置する二又の木)

オックメウエニと組んで熊の頭骨を安置する二又の木「ユクサパオニ」です。(写真141)



写真141

材料は、二又になったキハダです。全体の長さは210cm、二又部分は約50cm。(写真142)



写真142

二又の付け根付近から上の皮を剥ぎます。二又部分はイオマンテをする熊の頭の骨に合うように削ります。断面を楕円にします。(写真143)



写真143

先の方はケケチノイエイナウを接合させるために平たくしています。(写真144)



写真144

正確に二又を頭骨の幅に合わせるため縄で縛って幅を調整します。縛ったままでしばらく放置すると矯正されます。(写真145)



写真145

下部は基本的な削り方です。(写真146)



写真146

## ク (弓)・イツノレアイ (仕止め矢)

狩猟道具の「ク」と「イツノレアイ」は儀式でも重要な役割を果たします。(写真147、148)



ク

写真147



イツノレアイ

写真148

## ク (弓)

「ク」はイオマンテでは祭壇に供えたり、子熊に「イツノレアイ」・仕止め矢、「ヘペレアイ」・花矢を射る際に用います。

材料はイチイで、少し曲がりのある枝を使います。  
弾力のあるイチイはアイヌ語で「クネニ」と呼ばれ、弓を作る木という意味です。

長さ約120cm、直径2.5cmの節の少ない枝を選びます。(写真149)



写真149

小枝をはらい皮を剥ぎます。白い木の肌が出るまで丁寧削ぎます。(写真150)



写真150

両端からそれぞれ25cmずつ残して弓の曲がりの内側を削ります。これは弾力を増すためです。

断面が円の下4分の1ほどを平らにした形です。  
(写真151、図5)



写真151

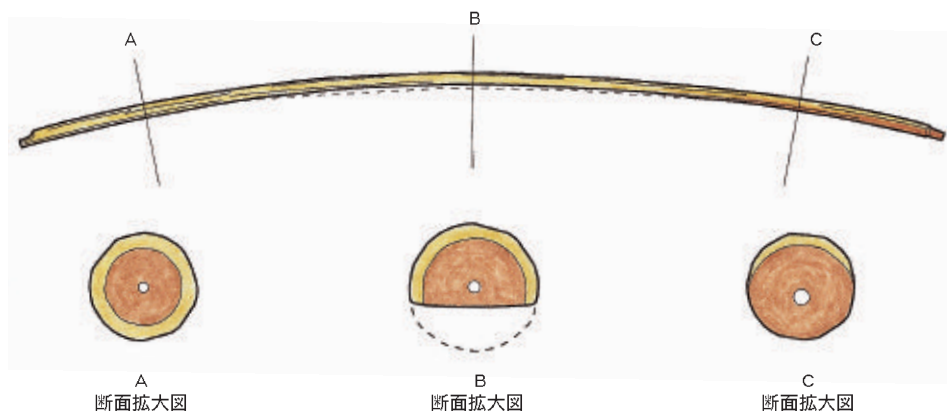


図5

根元側の太さを反対側と同じにし、弓づるをかけるために根元側の端から約2cmほどのところまで段をつけて細く削ります。(写真152、153)



根元側

写真152



枝先側

写真153

弓づるには丈夫なツルウメモドキなどの紐を使います。根元側に弓づるを輪にしてかけます。  
(写真154)



写真154

脚をかけてたわませ、反対側に弓づるをかけて数回巻いてとめます。このとき、弓づるを長めにとっておきます。長く残した弓づるでイナウルを縛りつけます。(写真156、157、158)



写真156



写真158



写真157

## イソノレアイ（仕止め矢）

熊を仕止める矢「イソノレアイ」の材料にはオニガヤ、根曲り竹、シカのすねの骨、タカの尾羽、イラクサの紐を使います。

シカのすねの骨を縦に割り、削ります。写真の中央が縦に割ったもの。左が削り終わったすねの骨です。

鹿の骨は、矢をまっすぐ遠くへ飛ばすために矢の前側を重くするためのものです。(写真159)



写真159

端は矢がらに刺して固定するため細く、矢じりのつく側は先を徐々に薄く、細くして平らにします。(写真160)



写真160

矢じりは十分に乾燥した根曲がり竹を使います。竹を半分に割り先を尖らせます。かつて他の地域のアイヌが矢じりの材料の根曲がり竹を手に入れるために白老まで来ていたといえます。(写真161)



写真161

節を利用して削ります。獲物に矢じりが刺さってから抜けないように矢じりの後側の両端を尖らせてます。(写真162、163)



写真162

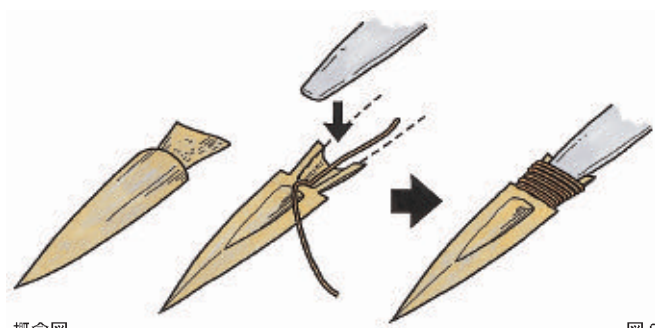


写真163

矢じりをとめます。イラクサの紐を矢じりと鹿の骨の間にに入れて巻きます。(写真164、図6)



写真164



概念図

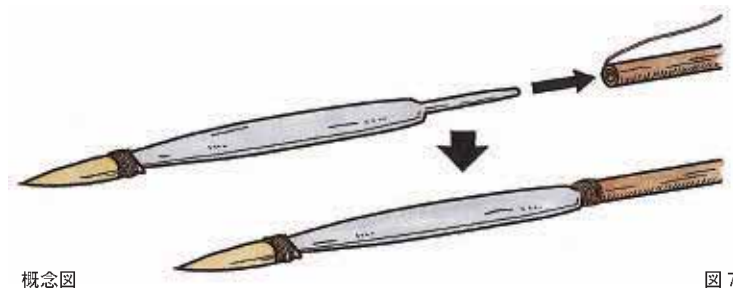
図6

矢がらの材料はオニガヤです。節を削って表面を滑らかにします。

オニガヤの切り口の穴を削って調整し、骨の接合部と合わせます。骨の部品を矢がらに差し込み、イラクサの紐を巻いて固定します。(写真165、図7)



写真165



概念図

図7

矢がらの後端はV字型に削ります。(写真166)



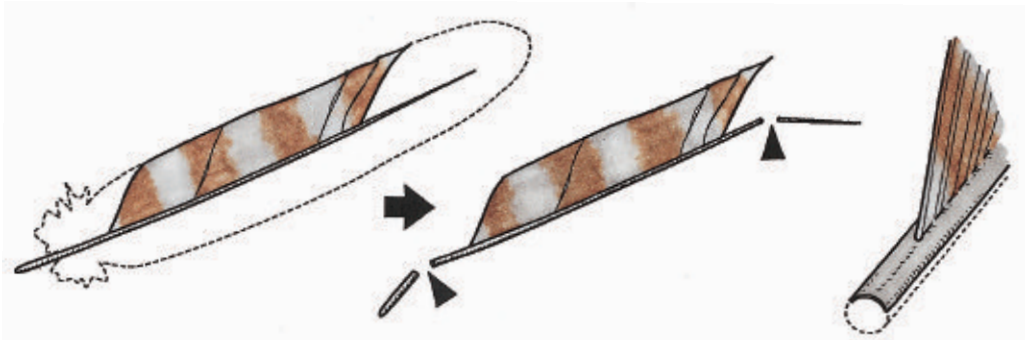
写真166

矢羽をつけます。タカの尾羽の短い側は羽根部分をちぎり取ります。

芯は前後とも2cmほど残し、前後の羽根を指でちぎり取ります。矢がらにとめやすいよう羽の芯を削ります。(写真167、図8)



写真167



概念図

図8

2枚の矢羽は左右対象に作ります。残しておいた矢羽の両端の芯をイラクサの紐で縛ります。矢羽は前後と中程の3個所で固定します。

ハサミで羽の先を整えると完成です。(写真168、169)



写真168



写真169

矢じりは獲物に刺さると矢じりが矢から外れ、体内に留まるようになっています。

猟のときには矢じりにトリカブトの毒を塗りましたが、イオマンテでは毒は使いません。イソノレアイはイオマンテでも熊を仕止めるために射る矢です。

(写真170、171、172、173)



写真170



写真171



写真173



写真172

## カムイソ（神の座）

「カムイソ」は、子熊のカムイを室内に迎え入れた際の座となります。ガマを編んで作るゴザで赤と黒の布で文様が入ります。(写真174、175)



ガマ

写真174



カムイソ

写真175

ゴザを編む道具「イテセニ」を使います。一本のガマを縦に半分に裂き、上下を逆に合わせて、編み込んでいきます。(写真176)



写真176

縦糸にはおもりの小石がつけられ、前後の糸を入れ替えて編みます。(写真177)



写真177

赤と黒の木綿布で文様を施した幅80cm、長さ110cmの特別なゴザです。

イオマンテの用具の中でカムイソなどのゴザ編みは女性の仕事です。(写真178)



写真178

## ケトウシ (神へのお土産を入れる入れ物)

「ケトウシ」はカムイへのお土産の入れ物です。袋状の「ケトウシ」には干したサケや団子などの食べ物、そして弓矢など親元へ帰る子熊へのお土産を入れます。

ケトウシには背負い縄「タラ」が組み合わされます。(写真179)



写真179

# 〈神の旅立ち お土産〉

## へペレアイ（花矢・子熊の矢）

「へペレアイ」は、子熊のカムイに持たせるお土産用の矢です。  
(写真180)



写真180

矢の先の部分は太さ5cm、長さ26cmほどのミズキを使い4つに縦割りにします。

これは木の芯を避け、均質な部分を使うためです。  
(写真181)



写真181

材料を丸い棒状に削り、根元側を先細りの形にします。表面は滑らかに削り、さらにマキリの背で擦ります。

こうすると後で塗る墨が染み込まず、文様を削り出したとき、滲みが無くきれいに仕上がります。  
(写真182)



写真182

削る段階を示しています。右は四つ割りの材料です。(写真183)



写真183

上側を細くします。繋がっている部分で直径が半分ほどになるまで同心円状に削ります。この段階で十分に木を乾かします。(写真184、185)



写真184



写真185

今度は花矢の本体に墨汁を塗ります。古くはシラカバを燃やしたすす(煤)を塗っていました。墨汁を十分に乾かします(写真186、187)



写真186



写真187

墨汁が乾いてから文様を彫ります。マキリで削り取っていくと木の白と墨の黒で文様が浮かび上がります。(写真188、189)



写真188



写真189

ヘペレアイの文様はいくつかの種類に分けられますが、白老には2種類の文様が伝わっています。

この撚りのかかった文様の矢は「チノイエアイ」です。(写真190)



写真190

次に上の部分に削りかけを作るようにして細かく削っていきます。

本体を回しながら繰り返し作業をすると花のようになってきます。(写真191)



写真191

最後まで削りかけを作ります。(写真192、193)



写真192



写真193

白老の花矢です。左と中央はイトクパを入れた矢「チトクパアイ」で送り主を表わしています。右は「チノイエアイ」で子熊のカムイへのお土産となる花矢です。(写真194、195、196、197)



写真194



写真195



写真196



写真197

矢がらは、イソノレイと同じくオニガヤです。節がひっかからないように削って滑らかにし、弓づるをかける側は英語のV字に削ります。(写真198)

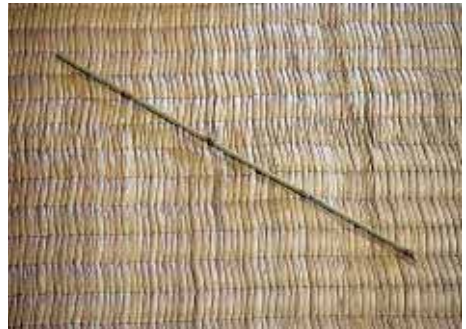


写真198

矢がらの先の空洞の中にイラクサの紐の先を入れ、そこに花矢を差し入れて紐を巻き固定します。子熊のカムイを送る際、東の方向に射る花矢以外は矢羽を付けません。(写真199、200、201)



写真199



写真200



写真201

「ヘペレイ」はイオマンテのとき子熊に打つ花矢です。子熊に花矢を射る儀式は、イオマンテの中でも重要な儀式です。古老だけでなく子供たちにも矢を射たせ、狩猟民族であるアイヌの精神を伝えます。

イオマンテではもてなしを受けた子熊のカムイがカムイモシリへ帰るときに東の空に向けて矢を射ます。子熊のカムイはその矢に導かれてカムイモシリに帰っていくのです。

## おわりに

アイヌはヒグマをキムンカムイ・山に住む神と呼び畏れ敬ってきました。カムイである子熊の霊を送るイオマンテはアイヌにとって最も重要で神聖な儀式の一つです。

北海道の厳寒期、3日間にわたって盛大に行われるイオマンテは準備に何日もかけました。かつてイオマンテが生活の一部として執り行われていた時代、アイヌの集落を上げての儀式に、人々は心を込めて道具を作ってきたのです。

イオマンテとは神々とともに暮らすアイヌの精神そのものを伝える民族の遺産なのです。



## 参 考 文 献

イオマンテの道具の制作にあたって、参考となる文献をいくつか紹介します。

- アイヌ文化保存対策協議会編  
1969：『アイヌ民族誌』下 第一法規出版
- 伊福部宗夫  
1969：『沙流アイヌの熊祭』みやま書房
- 萱野茂  
1978：『アイヌの民具』すずさわ書店
- 萱野茂  
1979：『写真集アイヌーニ風谷のウトンムヌカラとイヨマンテ』国書刊行会
- イヨマンテ実行委員会監修  
1985：『イヨマンテー上川地方の熊送りの記録』小学館
- 青柳信克編  
1982：『河野広道ノート』民族誌篇1 北海道出版企画センター
- 名取武光  
1985：『アイヌの花矢と有翼酒箸』六興出版
- フォスコ・マライニ  
1994：『アイヌのイクパスイ』財団法人アイヌ民族博物館
- 満岡伸一  
1987 [1923]：『アイヌの足跡』財団法人アイヌ民族博物館
- 財団法人アイヌ民族博物館  
1990：『イヨマンテー熊の霊送りー報告書』財団法人アイヌ民族博物館
- 財団法人アイヌ民族博物館  
1991：『イヨマンテー熊の霊送りー報告書Ⅱ』財団法人アイヌ民族博物館
- 財団法人アイヌ民族博物館監修  
1997：『アイヌ文化の基礎知識』草風館
- 秋野茂樹  
1998：「アイヌの「送り儀礼」に関する文献資料」『アイヌ民族博物館研究報告』第6号  
アイヌ民族博物館
- 財団法人アイヌ民族博物館  
2000：『ポロチセの建築儀礼』アイヌ民族博物館
- 久保寺逸彦  
2002：『アイヌ民族の宗教と儀礼』久保寺逸彦著作集1 草風館

## イオマンテの道具類を展示・収蔵している施設

イオマンテの道具類を展示、あるいは収蔵している施設をいくつか紹介します。

### 北海道内

- 財団法人アイヌ民族博物館
  - 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
  - 旭川市博物館
  - 網走市立郷土博物館
  - 浦河町立郷土博物館
  - 帯広百年記念館
  - 萱野茂・二風谷アイヌ資料館
  - 川村カ子トアイヌ記念館
  - 静内町アイヌ民俗資料館
  - 標津町歴史民俗資料館
  - 弟子屈町屈斜路コタンアイヌ民俗資料館
  - 苫小牧市博物館
  - 名寄市北国博物館
  - 函館市北方民族資料館
  - 美幌博物館
  - 平取町立二風谷アイヌ文化博物館
  - 北海道大学農学部附属博物館
  - 北海道開拓記念館
  - 北海道立アイヌ総合センター
  - 北海道立北方民族博物館
  - 幕別町蝦夷文化考古館
  - 室蘭市民俗資料館
- 白老町若草町2-3-4  
札幌市中央区北1条西7丁目  
旭川市神楽3条7丁目  
網走市桂町1-1-3  
浦河町字西幌別273  
帯広市緑が丘2  
平取町字二風谷  
旭川市北門町11丁目  
静内町真歌  
標津町字伊茶仁278  
弟子屈町字弟子屈276-1  
苫小牧市末広町3-9-7  
名寄市緑丘222  
函館市末広町  
美幌町字美禽253-4  
平取町字二風谷  
札幌市中央区北3条西8丁目  
札幌市厚別区厚別町小野幌  
札幌市中央区北2条西7丁目  
網走市字塩見313-1  
幕別町千住114-1  
室蘭市陣屋町2-4-25

### 北海道外

- 稽古館
  - 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
  - 東京国立博物館
  - アイヌ文化交流センター
  - 国立民族学博物館
  - 大阪府立近つ飛鳥博物館
  - 大阪人権博物館
  - 天理大学付属天理参考館
  - 松浦武四郎記念館
- 青森市大字浜田玉川207-1  
仙台市青葉区国見1-8-1  
東京都台東区上野公園13-9  
東京都中央区八重洲2丁目4-13  
吹田市千里万博公園10-1  
大阪府河内郡河南町大字東山299  
大阪市浪速区浪速西3-6-36  
天理市布留町1  
三重県三雲町大字小野江383

アイヌ生活文化再現マニュアル  
イオマンテ  
熊の霊送り  
【道具編】

---

2003年3月 発行

発行 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001

北海道札幌市中央区北1条西7丁目

プレスト1・7 (7階)

TEL (011) 271-4171 / FAX (011) 271-4181

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で禁止されていますので、あらかじめ財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構あてに許諾をお求めください。

